

和牛雌牛の肥育技術向上による収益確保の取り組み

和牛雌牛は素畜費が去勢牛と比べ安価なことから、去勢牛と同レベルで肥育できれば収益性が高くなる。今回は和牛雌牛を導入・肥育し、年々枝肉重量と肉質を改善している肥育農場の取り組み事例を紹介する

和牛雌牛肥育の概要

和牛肥育にかかるコストのうち、素畜費が約6割を占めるため、生産費の低減には素畜費をいかに下げるかが重要になる(図1)。和牛の子牛価格の推移を見ると、1頭当たり5〜10万円の雌雄差があり、雌牛の方が去勢牛と比べて安価であることがわかる(図2)。一方で雌牛の肥育は、①枝肉重量が小さい、②皮下・筋間脂肪などの脂肪がつきやすい、③肉色が濃くなりやすいなどの欠点があるため、肥育農家から敬遠されやすく、高度な技術が必要である。

肥育技術のポイント

当農場は近隣の素牛市場から35万円を下回る安価な和牛雌牛を主に導入し、28〜29カ月齢まで肥育している。農場の成績改善をめざして次の2点をポイントに肥育している。

①大豆粕の給与
雌牛の枝肉重量が小さい要因は骨格にある。骨格の大型化については、肥育前期まで(14カ月齢前後まで)の発育期に飼料性タンパク質を十分給与することが必要である。当農場では素牛導入後、半年間を目安に1頭当たり1日最大1・5kgの大

②粗飼料の使用方法

雌牛は脂肪がつきやすく、特に皮下・筋間・腎臓周囲の脂肪を厚くすることは枝肉重量の大型化にも好ましくない。これを抑制するために肥育前期の牧草類の給与量を調整している(表)。牧草類を与えすぎると1メン内の脂肪酸(特に酢酸)の生成量が多くなり、酢酸を基にして脂肪酸の合成が進み、脂肪組織中に存在するグリセリンと結合することで、過度な脂肪が生成・付着してしまふからである。なお雌牛は脂肪や黄体にβカロテンを保有しやすく、

定期巡回の継続

そのほか飼槽や水槽の清潔な管理や食いつまませるための工夫(早朝の給餌、多回給餌、餌寄せ)などの実施と定期的な巡回指導を続けながら、従業員の意識改革を進めた。その結果、枝肉重量についてはこの3年では15kgアップ(図3)、また上物率についてはおよそ20%も上げることができ(図4)、収益性が大きく改善した。今後も系統技術者の定期巡回を継続しながら和牛雌牛の肥育技術を高めて、枝肉重量のさらなる増加を図っていくことが目標である。

図1：和牛肥育にかかる生産費の内訳

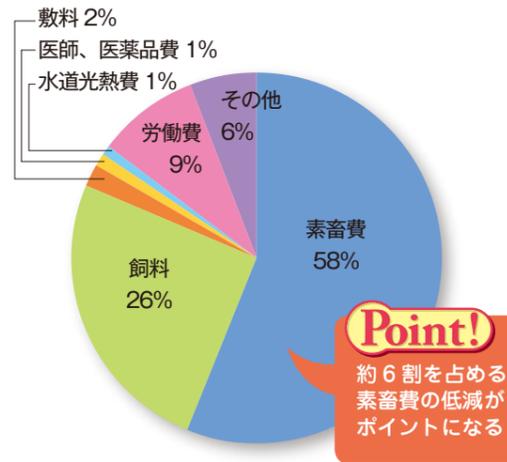
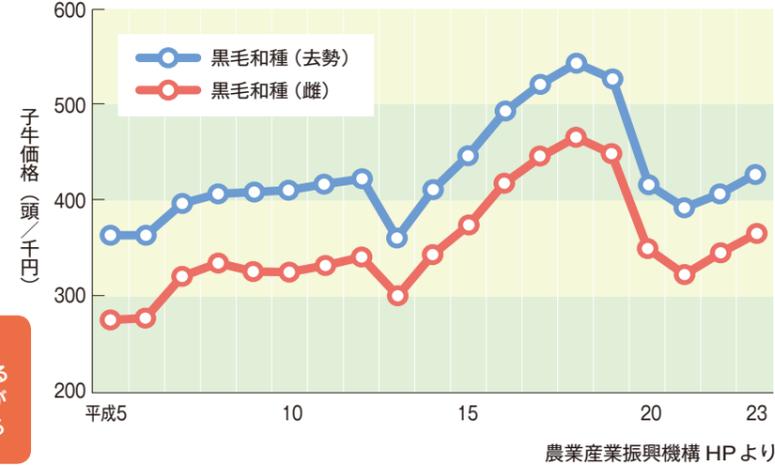


図2：子牛価格の推移



雌牛の体格向上への取り組み



写真1：導入後6ヶ月経過(約15ヶ月齢)の牛



写真2：大型化した出荷前の和牛雌牛

Point!

この時期は体高の発育と頸・肩幅の充実にポイントをおいて牛を見る

図3：枝肉重量の推移

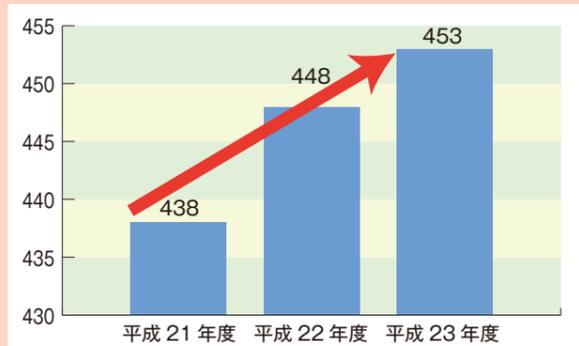
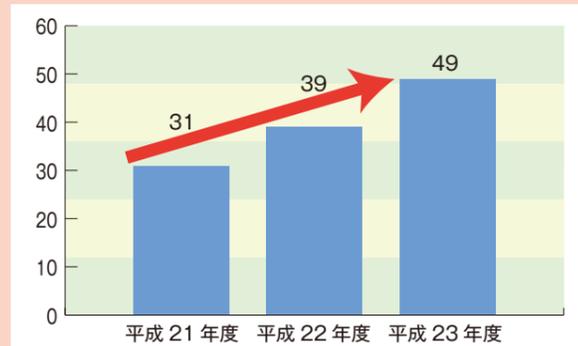


図4：4等級以上率の推移



表：和牛雌牛給与体系例(素牛導入体重250kgの場合)

月齢	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28
体重	250	265	290	320	350	380	410	440	470	500	530	555	580	605	625	645	665	685	705	720
肥育前期	3.5	4.2	4.8	5.0	3.0															
肥育後期					2.5	6.3	7.3	8.3	8.6	9.2	9.2	9.3	9.4	9.4	9.4	9.4	9.4	9.4	9.0	8.2
大豆粕	0.5	0.8	1.0	1.5	1.5	1.0	0.5													
チモシー	0.5	0.5	0.5																	
稲わら	2.0	2.0	2.0	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.0	1.0	0.8	0.7	0.5

DATA 事業規模
所在地：九州地方
飼養頭数：和牛雌牛450頭
従業員数：4名